

◎リンネル…リネン (英) または亜麻布 (あまぬの)。亜麻の繊維を原料とした織物の総称。フランス語ではリンネル。

エレ (Elle)…エレは、布地などの寸法を測るための〈単位〉の一種。メートル法を採用する前のドイツでの尺度。肘から中指までの長さ。また肩から中指までを指す場合もある。これは主に仕立て屋 (服屋) が使っていたとされるもの。かつては各地方によりまちまちで統一した長さはなかった。バイエルンとプロイセン、おなじバイエルン地方内でも不統一で、北ドイツでは独自の独自の長さをもっていた。

※クラスタ (Klafter) - : 日本語の「尋・ひろ」に当たる。大人が両手を広げた時の長さ。日本の場合には、釣り糸の長さや水深を言う時。1,8 m 程度 (私の場合は 1.7 m)。

※オンス (ounce, 記号:oz) …ヤード・ポンド法の質量の単位。3種類あるが、単に「オンス」と言った場合には常用オンスを指すことが多い。1常用オンスは、正確に 28.349 523 125 グラム。16 オンスが 1ポンド (453.592 37 グラム)。

※クォーター (quarter) は、4分の1を意味する語。穀物の体積の単位では、約 290 ㍓。

※ツェントネル鉄…かつて使われていた質量の単位。centner (独:ツェントネル、英:セントナー)、キンタル (quintal) はとも言う。1キンタルは 50 kg 前後

※ブッシェル…ヤード・ポンド法における体積 (容積) の単位。

1英ブッシェル = 正確に 36.368 72 リットル = 8英ガロン。

1米ブッシェル = 正確に 35.239 070 166 88 リットル = 正確に 2150.42 立方インチ = 8米穀物ガロン

◎ゲルマン 69p …現在のドイツ北部・デンマーク・スカンディナヴィア南部地帯に居住していたインド・ヨーロッパ語族 - ゲルマン語派に属する言語を母語とする諸部族・民族。

現在のデンマーク人、スウェーデン人、ノルウェー人、アイスランド人、アングロ・サクソン人、オランダ人、ドイツ人などの祖先となった

※アングロ・サクソン諸国…英語を国語・公用語とする白人主流派の先進国であるイギリス、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド (稀にアイルランドと南アフリカ共和国を含む) [要出典]をアングロ・サクソン諸国と呼ぶ

ローマン…多く複合語の形で用い、ローマの、ローマ人の、ローマ帝国の意。

※カエサル「ガリア戦記」(紀元前 50 年頃)…。紀元前 1 世紀にはローマのカエサルらによって征服される。中世にはフランス人に変質していく。※不明な点あり

◎古典派経済学 (要約的に)

・労働価値説を理論的基調とする経済学の総称。18 世紀後半からスミス、マルサス、リカード、ミルといったイギリスの経済学者によって発展されたため、イギリス古典派経済学とも呼ばれる。1870 年代に誕生した新古典派経済学によって論駁され、主流派の座から退いた。マルクス経済学は古典派経済学を継承。

・「商品を二重の形態の労働に分析すること、使用価値を現実的労働または合目的な生産的活動に交換価値を労働時間または同等な社会的労働に分析することは、イギリスではウィリアム・ペティに、フランスではボアギユベールに始まり、イギリスではリカードに、フランスではシスモンディに終わる古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的最終成果である。」(マルクス・「経済学批判」)

・労働価値説には支配労働価値説 (ある商品の価値が、それを支配する他の商品の量によって決定されると言う説) と投下労働価値説 (ある商品の価値が、その商品の生産に投入された労働量によって決まると言う説) という 2 種類のものがあるが、より基本的な考え方として価値を生み出すのは人間の労働であるという思想があった。

この考え方は古典派経済学者のリカードやマルサスに至るまで古典派の考え方の基礎であり続けた。また、古典派経済学は経済社会を「資本階級」「労働者階級」「地主階級」の 3 つの階級に分けて、これを中心に分析をしている。

・(メモ)

①(第2節で)「商品に含まれている労働の二面的な性質は、「私(マルクス)がはじめて批判的に証明したのである。」78p ※この点が飛躍点!

※マルクスは前者を具体的有用労働、後者を抽象的人間労働と呼んで区別した。

②マルクス自身、「資本主義的生産様式」が支配的な社会を念頭において、この第1章の考察をすすめていることは確かだ。しかし、「売るために生産する」という行為自体は、資本主義社会よりかなり以前に発生している。「商品が生産される社会」という意味では、必ずしも、資本主義社会とは同義語ではない。

③商品生産社会の特徴は、私事として独立に営まれる労働と、社会的分業がむすびついていること。

◎ニコラス・バーボン…(1640年-1698年)68p…イギリスの経済学者、医師、金融投機家。重商主義者であり、自由市場の最初の支持者の一人とされる。世界初の火災保険会社の創設者としても著名である。

○ジョン・ロック…(1632年-1704年)69p…イギリスの哲学者。イギリス経験論の父と呼ばれ、主著『人間悟性論』(『人間知性論』)。政治哲学者として自由主義的な政治思想は名誉革命を理論的に正当化するものとなり、その中で示された社会契約や抵抗権についての考えはアメリカ独立宣言、フランス人権宣言に大きな影響を与えた。

○ル・トゥロース「社会的利益について」70p…不明

○ウィリアム・ペティ…(1623年-1687年)81p…イギリスの医師、測量家、経済学者。労働価値説を初めて唱え、また、政治算術派の先駆となったことから、古典派経済学と統計学の始祖ともいわれる。

※ペティは、古典派経済学の研究法や、要となる多くの概念を生み出した。ペティが余剰という概念をとり入れたことにより古典派経済学が誕生した。

余剰こそ経済成長の要だと考えた。生産とは、余剰を生み出すための過程であり、社会が必要とする以上の産出を生み、投入を再構築するもの、と考えた。

また、ペティは財の「自然価格」と「市場価格」を区別した。[

○ピエトロ・ヴェルリ…イタリアの経済学者、重農学派の学説を批判した最初の一人。81p

○アダム・スミス…(1723年-1790年)87p、イギリスの哲学者、経済学者。主著に経済学書『国富論』(1776年)がある。

※国富論…近現代における経済学の出発点と位置づけられているだけでなく、社会思想史上の古典とも位置づけられている。「序論および本論の構想」においては、富を生活の必需品と便益品すべてと位置づけ、年々の労働によって生み出されるものとした。この定義は、貴金属などを富と見なした重商主義の定義などを批判あるいは否定したものとされる。後の古典派経済学の要素のほとんど、あるいは後の経済学に登場する着想のほとんどが含まれているとさえ言われる。

◎古代インドの共同体 79p… 『資本論』(第1部第12章)では、インドを直接の素材として、アジア的共同体が、(1)土地の共有、(2)農業と手工業との家内的結合、(3)固定されたカースト的分業、の三つの要素からなるとされている。

※マルクスは《経済学批判》(1859)の序言の中で〈アジア的・古代的・封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期〉であるといっている。しかしマルクスはアジア的生産様式の内容についてほとんど説明していないので、その理解をめぐって論争が続いている。※資本論でインドについての記述は3カ所。

※マルクスの生きた時代の「インド=アジア論」(英国のインド植民地支配情報から)の理解しかなかった? 晩年(1880年代)のマルクスはロシア研究のためにロシア語を学び、インドからロシアにつながる原始的共同体の存在を「発見」(専制国家-農耕共同体論)したとされるが、実態とはかけ離れていた?

◎88pの work 使用価値を生み出す労働-labour 価値を作り出し量的にのみ測定される労働。

※69pの「worth 使用価値の意味 - value 交換価値の意味に」